

## 初耳花言葉

劇作家 演出家 俳優

藤井 颯太郎

1995年生まれ、兵庫県立立峰北高校。演劇科在学中、幻灯劇場を旗揚げ。18歳の時に書いた戯曲「ルル」が、2017年に『せんたい短編戯曲賞』を最年少受賞。近年は、架空のモデルに宿泊しながら観劇する「泊まる演劇」シリーズの演出を手掛けたり、NHK連続テレビ小説「おちよん」に出演したり、ABCテレビ「THE GREATEST SHOW ON EARTH」で、A・E・I・G・O・P・T・L・R・S・H・V・W・X・Y・Zの26文字それぞれに音楽劇を発表するなど、多方面で活動中。

いつもより早く目が覚めてしまった。妻を起ささないよう慎重に布団から抜け出しキッチンへいき、珈琲を淹れる。朝日はまだ昇っていないくて、三月末にしては肌寒い。ソファアに身体を預け、手のひらをマグカップで温める。静かだ。今日は、はじめて息子の演奏会を聴きにいく。

優太がバイオリンを始めたのは六歳の頃。最初の先生は妻だった。プロの音楽家に育てようなどと大それたことは考えてなくて、ただ妻自身がそう育ったように、子供の頃から音楽に触れて欲しいと願ったのだ。息子は思いのほか筋が良かったらしく、妻はやたらと息子を褒めた。気をよくした息子は一日中家でバイオリンを弾き続けるようになり、近隣住民からの苦情が後をたななかったで、わたしたちは防音室のある家に引っ越しすることになった。

指導に限界を感じた妻は、優太を町の音楽教室に通わせることにした。初回のレッスンが終わると講師の先生は、少し離れた町にすむ別の先生を紹介してくれた。わたしたちが思っていた以上に息子には才能があるらしい。その紹介された先生の元へ通い二週間もすると、また速くの街の先生を紹介され、その先生もまた別の先生を紹介してくれた。息子に才能があることは嬉しかったが、同時に、なんだか緊張した。亡くなった母の病気が見つかった時、次々と大きな病院へ移されたのを思い出した。息子が私の元から去ってしまうような気がしていた。妻は完全に息子をサポートする体制を整え、レッスンの為に息子について行き、時には東京の先生のもとで学ぶため数ヶ月間、別居することもあった。なぜ息子のバイオリンに、皆がそれほど興奮するのか、私は理解することができなかった。

もう起きたの？私が飲んでいて珈琲を取り上げ飲むと、寝巻のままの妻が言った。妻が起きてきたので少し早いが冷蔵庫を漁る。朝食を作るのは私の担当なのだ。もしかして緊張してる？妻の言葉に首を横へ振ったが、実際のところ私はかなり緊張していた。卵とベーコンを焼き、パンにジャムを塗る。窓の外はもう明るくて、青白い光が部屋を満たし始めていた。インターホンが光ったので荷物を受け取りに行く。注文していた植物園の図録だった。四季ごとに香りを変える梅林や桜林、風に揺られ踊る宿根草の丘、色彩豊かな異国の花畑。優太と過ごす時間がまだあった頃、家族でよく植物園に遊びに行った。息子と私を繋ぐ共通の趣味が植物だった。植物博士だった息子は針葉樹の特性や、夜だけ咲く花と眠る植物の違い、あまり知られていない花言葉までなんでも早口に教えてくれた。植物を指差し「これは？」と聞くと、いつも知ったかぶりして出まかせに聞いたことのない花言葉を話しますが愛らしくて、私と妻は時々質問攻めにした。最新の図録を見る限り、家族

で通ったあの植物園はもう改装されてしまって、当時の面影をほとんど残していなかった。電車で揺られながら、私の中の緊張はどんどん高まっていった。優太はドイツへ留学を終え、日本へ帰国後、プロのオーケストラに入団したのだった。今日は、そのオーケストラの演奏会に行くのだ。実は、息子がまだ小さな頃、彼がコンクールで演奏するのを一度だけ見たことがある。それは本当に素晴らしい演奏だったらしい。息子が演奏を終えると、客席は大きな拍手を送った。耳の間こえない私の肌や骨に伝わるほど、大きな拍手だった。妻は泣いていた。客席を振り返ると、全く知らない人たちが涙を拭いていた。この劇場で唯一人私だけが、息子の素晴らしさを知ることが出来なかったのだ。それ以来、息子の演奏を劇場で見られたことがない。私の緊張を察したのか、別に深い意味はないのか、妻はずっと手を握っていてくれた。

最寄り駅へ着くと、演奏会が行われる劇場がホームからでも見えた。屋根や建物の周囲が緑と自然に覆われた美しい劇場だった。妻は優太と連絡を取り合っていて、どうやら終演後、食事をする約束を取り付けられたらしい。終わったら打ち上げとあるんじゃないの？と訊くと、久しぶりにご飯行きたいんだって、優ちゃんが嬉しそうに妻が言った。改札から劇場へ向かう道中、花屋を見つけた妻が花束を買おうと言いついた。持つて帰るのもかさばるからやめておこうと説得したが、結局小さなブーケを買うことになった。

ホールの入口でパンフレットを受け取り客席へ入ると、すでに奏者たちは楽器を演奏していた。妻に聞くと、まだ演奏は始まっておらず、楽器のチューニングをしているのだという。調節を続けるバイオリニストの一群の中に、優太がいた。息子は譜面を丁寧に並べなおし、今日の楽器の調子を確かめていた。ふと僕の方へ向いた息子は、少しおどろいた表情をしてきたの？と口を動かした。間も無くして指揮者がやってくると、会場は一気に静かになった。音は聞こえずとも、客席、舞台上の演奏者、数千人の人々がいつせいに動かなくなったのだ。

指揮棒と共に、舞台上の数千人が同時に動き出した。音圧がしっかりと身体に届く。さらに驚かされたのは、オーケストラ全体が巨大な一体の獣のように大きく呼吸しているように見えたことだ。同じ楽器を演奏する人たちが一糸乱れず同じように呼吸し演奏する姿は、精度の高い群舞のようにも見えた。オーケストラの演奏会がこれほど視覚的にも面白いものだと想像していなかった。それは私の中に眠っていた、植物園での光景を呼び覚ました。風に吹かれ海のように揺れ動く花畑と、音に合わせ呼吸するオーケストラが重なって見えた。呆気に取られながら優太に目をやると、息子は、音の洪水の中で気持ちよさそうに目を瞑っていた。気付くと私の頬は濡れていた。

オーケストラの演奏会の終わり方はなんて呆気ないんだろう。舞台上で息を合わせ超絶技巧を繰り返していた奏者達が、演奏が終わるとなんとともまともなくバラバラと帰ります。挙句、お客さんに混じって楽器ケースを担いだ人たちが駅へ向かっている。そしてその一群の中に優太がいた。優太の姿を見るや妻は駆け寄り、早口で褒めちぎると、ブーケを渡すように私に催促してきた。ブーケを渡すと優太は嬉しいんだか嬉しくないんだか絶妙な表情を見せたあと、これ、ヒヤシンスだねと真ん中の花を指して言った。妻が花言葉なんだってと聞くと、優太は苦笑いし、しばらく思い出そうとした後、お腹すいた、じゃない？と言って、レストランへの道を歩き始めた。

